

【研究ノート】

ロックフェラー家のフィランソロピーと バプテスト教会*

——The General Education Board 設立の歴史的な前提——

鮫 島 真 人

1 はじめに

アメリカ合衆国のバプテスト教会¹⁾の信者であったJ・C・ターナーは彼の著作『バプテストの嗣業』²⁾のなかで、バプテスト教会の救いの福音を伝える歩調の歴史は全世界に対してとても緩やかであり、それと比較すると、スタンダード・オイル社（Standard Oil Company, スタンダード社と略記）の歴史は50年余りであるが、同社の製品の販売されていない国は地上に存在しないと述べている。ターナーは同社のグローバル化を褒め称える一方でバプテスト教会の布教活動に発破をかけているのである。

スタンダード社を設立し、約20年でアメリカ石油の精製・輸送業界のシェアの90パーセント以上を握り、企業合同の形態であったスタンダード・オ

* 本稿の作成にあたっては、同志社大学の布留川正博教授にご指導を仰ぎ、西南学院大学神学部の金丸英子准教授からはキリスト教史・バプテスト派等について示唆に富んだご助言を頂戴しました。厚く感謝致します。

1) バプテスト教会を簡潔に定義すると、「主イエス・キリストの福音を広め、その制度（教理・礼典）を維持するために、集められ、自発的にバプテスマを受けてひとつの体として結ばれた信仰者達の会衆」である。クリスチャン（1979）43ページ。

2) ターナー（1950）178ページ。

イル・トラスト³⁾ (SOT) を形成して「石油王」と呼ばれたのが、熱心なバプテスト派の信者であったジョン・D・ロックフェラー1世 (John D. Rockefeller Senior, 1839-1937, ロックフェラーと略記) である。企業家精神に富む彼は、当時、生まれて間もない、チャンスと可能性に満ちた市場であった石油産業のなかで比較的にリスクの低い石油精製業 (製油業) を開始した。彼は19世紀末に原油生産・石油精製・石油販売業を包括する石油産業をアメリカの代表する産業に成長させる革新を行い、現代の石油化学工業の社会の礎を築いた⁴⁾。

新興の企業家になる以前から、ロックフェラーは彼の母イライザ・D・ロックフェラー (Eliza D. Rockefeller, 1813-1889, イライザと略記) の教えを守り、教会や学校等への厳格な什一献金⁵⁾ を行っていた。20世紀に入ると、彼は企業家活動で集積した富を用い、息子のジョン・D・ロックフェラー2世 (John D. Rockefeller Junior, 1874-1960, ロックフェラー2世と略記) とバプテスト教会のフレデリック・T・ゲイツ元牧師 (Frederick T. Gates, ゲイツと略記) を中心に、ロックフェラー家のフィランソロピー活動を本格的におこなったのである⁶⁾。

ロックフェラー家はそれまでに考えられなかったほどの大規模な基金 (fund) を持つ大型財団を設立し、科学的なフィランソロピー活動⁷⁾ をおこなった。同家の初期の活動としては、1903年に The General Education Board (基金、約4,600万ドル、GEBと略記) を設立し、20世紀初頭のアメリカ南部において、農事試験場を活用した黒人の中等教育の普及活動がある。同家はバプテスト教会や

3) スタンダード・オイル・トラストにおける「トラスト」の発案者は、同社の弁護士であり、長老派教会の長老でもあったサミュエル・C・T・ドッドである。ドッドの「トラスト思考」は、イギリス法の信託制度から発想されたといわれている。

4) 鮫島 (2010, 2011a) 「ジョン・D・ロックフェラー1世の企業家活動と富の集積——1839-1911年—— (1) (2)」『経済学論叢』(同志社大学), 第62巻第3号, 第62巻第4号。本研究に関して小谷節男先生と第126回イギリス資本主義研究会の池本幸三等諸先生方から貴重なコメントを頂戴したことを記して感謝したい。

5) 什一献金はキリスト教において礼拝の一部であり、命と同じぐらい大切な収入の十分の一を神様にささげることであり、同献金 (十分の一献金, 十分の一寄付税) の什一とは、①十分の一、一割 ②井田法で徴収する租税、転じて土地にかかる税金を意味してキリスト教に由来する。

6) ロックフェラーの什一献金の詳細とフィランソロピー活動については、鮫島 (2011b)。

7) 同上論文, 134-135 ページ。

実業界の指導者たちと緊密な連合体を形成して GEB の活動を展開した。

ロックフェラー家は、1911 年の SOT の解体を意識した慈善トラストであるロックフェラー財団（The Rockefeller Foundation, 基金、約 1 億 5,400 万ドル）を 1913 年に組織した。その時に同財団は GEB の社会科学や農業開発部署等を吸収した。ロックフェラー財団は科学的な手法に基づく、国際的な大型の財団活動を行ったことで、近代の財団のモデルとなり、財団のフィランソロピー活動に革新を起したのである。

本稿の主題は、ロックフェラー家の GEB 設立に至る経緯の歴史的前提について、奴隷解放後の南部の貧困、人種差別による分離政策のなかでのバプテスト教会や黒人教会の置かれた状況、バプテスト教会からの要請であったユニヴァーシティー・オブ・シカゴの設立を明らかにすることである。

ロックフェラーは幼い頃から母イライザの教えを守り、毎日神への祈りを欠かさず、バプテスト教会に通って、自らを神に捧げ、什一献金をおこなった。彼は厳格な献金をすることや教会活動を通じて、教会の運営や慈善事業においても、浄財を的確に管理し、よりよい目的のための使用をすべきだと考えた。彼はそれらを実行するために、実践的な資金繰りを考慮した収支勘定が重要であると、より一層考えるようになった。そしてのちに彼の信仰心は、倫理的な姿勢と効率的に利益を追求する姿勢とを結び付けた。彼のこの信念はロックフェラー家の子弟教育やフィランソロピー活動に引き継がれた。

南北戦争後に解放されたアフリカ系アメリカ人たちは、南部の貧困、白人支配、人種差別による分離政策のなか、独力で黒人教会を設立して、黒人による社会的な組織化や教育水準の向上への道を開いた。北部バプテスト教会の黒人教育への援助活動は、どの教派よりも資金・人材的にずば抜けて大きかった。黒人バプテスト教会は北部バプテストの資本家の援助を受けて、黒人の学校建設を行った。一方南部バプテスト教会は 1890 年代半ば頃まで、黒人への教育活動も小規模で黒人バプテスト教会とほぼ完全分離した状態であった。そのために南部バプテストは自らの存在の大きさを、南部において

示さなければならなかった。

バプテスト教会からの要請に応じて、ロックフェラー家はシカゴ大学を1889年に設立した。同大学はロックフェラー家のフィランソロピーに欠かさない存在となるのであるが、GEB設立の歴史的前提のひとつとなった。また、南部の産業化を進めるうえで南部の貧困による教育問題を改善する目的で南部バプテストを中心に、南部と北部の実業界の指導者たちの支援を受けた南部教育会議(The Conference for Education in the South)の要請を受けて、黒人の中等教育の普及のために、同家はGEBの設立へと向かって行った。

ロックフェラー家のフィランソロピーに関する研究には、The General Education Board (1915)、Flexner and Bachman (1916)、Nevins (1953)、フォスディック (1956)、Fosdick (1962)、Abels (1967)、ニールセン (1984)、Bremner (1988)、チャーナウ (2000)などがあり、日本においては、三井報恩會 (1934)、三井報恩会 (1938)、アシザワ (2008)などがある。そのなかの文献で、GEBを主に扱った研究としては、The General Education Board (1915)が、1902年から1914年までのGEBの役員と基金の状況、農事試験場の活動を含む黒人の教育活動全般、GEBとバプテスト教会について述べている。また、Flexner and Bachman (1916)は1914年のメリーランド州の初等・中等教育の入学や教育制度についての問題点を分析し、Fosdick (1962)はロックフェラーの果敢なる人材や資金提供によるGEBの黒人の教育活動について好意的に述べている。

Nevins (1953)、Abels (1967)とチャーナウ (2000)はロックフェラーの企業家活動とフィランソロピー活動の両方を述べているが、量的にもGEBに関する記述は少ない。そのなかでも、GEBに関連する記述の比較的に多い方である浩瀚なチャーナウ (2000)においてさえ、1,181ページ(上巻、612ページ、下巻、569ページ)の本文中、22ページ(下巻、22ページ)が割かれているにすぎない。なお、使用されている資料文献は9本である。ほかの研究はロックフェラー財団を主とする研究であり、日本ではGEBを主に扱った研究はない。本稿のような、ロックフェラー家のGEB設立の歴史的前提を扱った論考は、管見の

限り、ないようである。

本稿において、第2章ではロックフェラーの什一献金、教会活動、聖書から学んだ考え方や教訓が、彼の信念となり、ロックフェラー家のフィランソロピー活動へと引き継がれた。またロックフェラー家の活動は教派を超えて幅広く行われたことについて、同家のセツルメント活動を取りあげ、Rockefeller (1909) 及び Nevins (1953) を使用して述べる。

第3章では南北戦争後から1890年頃までのあいだ、南部での北部バプテスト教会、南部バプテスト教会、黒人教会、黒人バプテスト教会のそれぞれの関係や状況を、北部バプテストの援助、黒人教育、黒人女性の役割などの面から説明して、GEB設立に繋がったことを明らかにする。文献は、Noble(1969)、エイミー（2004）及びノール（2010）を使用する。

第4章では、バプテスト教会の要請に応じて、ロックフェラー、ゲイツ、ハーパー、そしてアメリカ・バプテスト教育協会の4者が中心になって、どのようにアメリカの新しい高等教育の機関としてユニヴァーシティー・オブ・シカゴ（The University of Chicago）を設立したかについて説明する。文献は、The General Education Board (1915) 及び Goodspeed (1916) を使用する。

第5章では、ロックフェラー家は南北戦争後から、南部でバプテスト教会や初期の教育財団を通じて影響力を及ぼしていた。ロックフェラー家が同教会と南部教育会議からの要請を受けて GEB の設立へと集約されていったことについて、The General Education Board (1915)、Cubberly (1947) 及び Knight (1969) を使用して考察する。

2 ロックフェラー家の教会活動とフィランソロピー

ロックフェラーは熱心なバプテスト派の信者であった母イライザの教えを守り、毎日、神への祈りを欠かさず、毎週日曜日にはバプテスト教会に通った。彼の信仰心は幼少期から揺ぎないものであり、キリスト教はマックス・ヴェ

パー流の「資本主義の精神」⁸⁾と並んで彼の人生の2本柱であった。彼は父親ビッグビルの仕事の関係と長期の不在のために引っ越しを重ね、子供時代を振り回されて育った。そのために彼は教会に居場所を求めた。教会は彼にとってもうひとつの家族であった。クリーヴランド市にあるエリー・ストリート・バプテスト教会は150日間行われた信仰復興集会から生まれた教会だった。同教会は彼に友人と敬意を与えてくれた。

ロックフェラーは、アレグザンダー・スケッド牧師の聖書研究会で学んだ。スケッド牧師は彼の良き師となり、やがて同牧師から正式に教会員になるように誘われた。ロックフェラーは教会で掃除や雑用をしながら教会活動に勤しんだ。彼は15歳のときに同教会でスケッド牧師から洗礼を受けて正式な教会員となった⁹⁾。それ以後、神様や教会に深く感謝をしていた彼は、教会の日曜学校で子供たちに聖書を教える教師を務めた。彼の一番好きだった聖書の箇所は、「技に熟練している人を観察せよ。彼は王侯に仕え、怪しげなる者に仕えることはない」という旧約聖書の箴言22章29節であった¹⁰⁾。この箇所の内容は勤勉こそ富と名声を得るための手段であるという聖書のひとつの教えであった。

スケッド牧師の指導のもと、ロックフェラーは19歳で教会の執事となり、教会の財政管理に深く係り、21歳で教会の理事5人のうちのひとりに選ばれた。すると、彼は何週間もかけて、根気強く教会員に献金を募って教会の借金2,000ドルを返済し¹¹⁾、慢性的に財政難であった教会の運営を立て直した。

この経験から信仰生活も企業家活動と同じほど熱心であったロックフェラーは、ユークリッド・アヴェニュー・バプテスト教会やニューヨーク5番

8) 鮫島 (2011b) 120-121 ページ。

9) Nevins (1953) vol. 1, pp. 119-120.

10) 鮫島 (2011b) 123 ページ；日本聖書教会 (2009) 旧訳聖書, 1,250 ページ；ベンジャミン・フランクリンも『自伝』のなかで、厳格なカルヴィニストの父からこの聖書の言葉を度々繰り返し教えられたと述べている。「汝その業にはげむ人を見るか、かかる人は王の前に立たん、かならず賤者の前に立たじ」という旧約聖書の箴言22章29節。フラクリン, B. (1957) 152 ページ。

11) Rockefeller (1909) pp. 50-52.

街のバプテスト教会でも財政を任され、日曜学校でも奉仕をした。晩年彼はエリー・ストリート・バプテスト教会において、教会の仕事、日曜学校で教えたこと、そして、自営業者、セールスマン、工場労働者、事務員たちと出会えたことなど、その環境を本当に有難いことだったと感謝を述べている。

ロックフェラーはヒューイット・アンド・タトル商会に入社したところから有名な「元帳 A.」と呼ばれる帳面に支出の記録を付け始めた。「元帳 A.」への最初の記入は、1855 年 11 月 25 日の「伝道のため」の 10 セントの献金であった¹²⁾。1873 年にエリー・ストリート・バプテスト教会はロックフェラーの多大な協力もあって、新興住宅街のなかにユークリッド・アヴェニュー・バプテスト教会を建設して移った。

そのころのロックフェラーの什一献金は、1872 年が 6,930 ドル 68 セントで、翌年が 4,770 ドル 58 セントであった¹³⁾。ユークリッド・バプテスト教会は、世間ではロックフェラーの教会と呼ばれた。1880 年代初めの彼の寄付は、教会の年間予算の半分を負担するまでになっていた。ほかにも、ロックフェラー家は YMCA やユニヴァーシティー・オブ・シカゴの神学部のモデルになったニューヨークのユニオン神学校¹⁴⁾などに多額の寄付を行っていた。

ロックフェラーは、1872 年から 1905 年までのあいだ、日曜学校の先生を務めた。彼の妻であるローラ・S・ロックフェラー¹⁵⁾ (Laura Spelman Rockefeller, 1814-1915, ローラと略記) も積極的に教会活動に取り組み、教会において幼少組の先生を務めるなど、教育の分野に力を注いだ。ロックフェラー 2 世も両親を見習って、教会の日曜学校で先生を務めた。

ロックフェラー夫妻とロックフェラー 2 世は教会活動の一環である日曜学

12) Abels (1967) p.32. (訳書, 45 ページ.)

13) Nevins (1953) vol.2, p.479.

14) ユニオン神学校は 1836 年に長老派よって建てられ、設立当初からほかの教派の神学生を受け入れており、自由主義的な雰囲気なかで神学研究を行った。

15) ローラの結婚前の姓名はローラ・C・スペルマン (Laura Celestia Spelman) であった。スペルマン家は、マサチューセッツ州出身のピューリタンの直系の子孫で、彼女の父親ハビ・ビュエル・スペルマンはオハイオ州議会の議員で慈善事業家として有名であった。鮫島 (2011b) 124-125 ページ。

校以外でも、禁酒・禁煙運動に熱心であった。彼らは頻繁に同運動の拠点であるセントラル・フレンドリー・インへの寄付を行った。同運動において、1869年にシカゴで禁酒党が結成され、1895年に反酒場連盟が組織されたのであるが、その連盟なかにロックフェラー父子の名前が含まれていた¹⁶⁾。

また、ロックフェラー夫妻は、ロックフェラーの3女のアルタ・ロックフェラー (Alta Rockefeller, 1871-1962, アルタと略記) の影響でクリーヴランドのセツルメント運動へも多額の寄付をした。アルタは、当時のカレッジ・セツルメントの風潮と両親の影響で1895年頃から積極的にセツルメント運動 (Settlement Movement)¹⁷⁾に参加した。現在でもアルタの名前に因んでアルタ・ハウス・セツルメントと呼ばれ、クリーヴランドのリトル・イタリーにある。

このクリーヴランドのセツルメント地区において、1907年に3番目のハウ分館が開館したあとの1911年から1914年のあいだ、さらに5つの分館 (グレンビル分館, コリンウッド分館, ロレイン分館, スターリング分館, クインシイ分館) が建てられた。アルタ・ハウス・セツルメントに建てられたアルタ分館がさらに追加され、1914年には同セツルメントの付属施設として、ロックフェラーから図書館と体育館が寄贈された。そのあとに建設された分館を合わせて13の分館が、子供たちに図書館サービスを提供した¹⁸⁾。

当時クリーヴランド公共図書館の児童室長をキャロライン・バーナイト¹⁹⁾が務めていた。彼女は子供たちや図書館員を対象に優れた『お話の技術』を教授してもらう目的で、1905年からユニヴァーシティー・オブ・シカゴの教育学部の有名なストーリーテラーであったグドルーン・ソーン＝トムセン夫人を

16) 大宮 (2006) 161-165 ページ。

17) セツルメント運動とは社会改良事業のひとつでスラムの住人に金品を与えるだけでなく、彼らと一緒に生活をして教育や生活改善を行うものである。1860年代にイギリスで始まり、オックス・ブリッジの若者を取り込んだ。20世紀に入ってから、シカゴにおいて、ミシガン大学、ノースウエスタン大学、シカゴ大学の学生たちによって3つのセツルメント事業が行われた。ルドルフ (2003) 338-339 ページ。

18) ロング (1983) 162-163 ページ。

19) キャロライン・バーナイトはプラット・インスティテュート図書館学校を卒業し、ピッツバーグのカーネギー図書館で働き、1904年にクリーヴランドの児童室長に就任した。彼女の在任中に、クリーヴランド公共図書館は最大の拡張期を迎えた。同上書、157 ページ。

招待して定期的に講義をしてもらった。この講義はたいへん人気を博した²⁰⁾。

セツルメント運動のエリアのイタリア人はカトリック教徒であった。この運動への参加はロックフェラー家にとって、慈善活動という教会活動の一環であったと思われる。これはひとつの実例であるが、同家のフィランソロピー活動は一般的にバプテスト教会等を通じて行われるが、一方では教派を超え、メソジスト教会、長老派教会、クエーカー教徒、カトリック系、黒人教会、教育財団等と幅広く行われることに注意すべきである。

1893年に、ロックフェラーはアメリカ・バプテスト教育協会の書記であったゲイツをファミリー・オフィスであるロックフェラー事務所の顧問に雇った。そして彼は1897年に23歳でブラウン大学²¹⁾を卒業したロックフェラー2世を同事務所に就職させた。ゲイツの仕事はロックフェラーの社外の投資管理と慈善事業であり、スタンダード社の業務からは外れており、ロックフェラー2世に仕事を教える役目を兼ねていたと思われる²²⁾。

ロックフェラー、ゲイツとロックフェラー2世の3人は、賢明な什一献金をするために、協力して多くの分野から専門家をかき集め、同献金の案件ごとに効率的な組織をつくった。彼らは20世紀に入ってからの科学的なフィランソロピー活動をおこなうための準備として、ロックフェラーの賢明な什一献金のための「寄付行為に関する4つの原則」²³⁾から「寄付の技法」²⁴⁾等を編

20) 同上書、163ページ。

21) オハイオ・バプテスト教育協会は1832年のデニソンで主催された年次大会において、国家とともにカレッジは将来の道を一緒に歩むと宣言しており、大覚醒運動の所産としてカレッジ設立が行われたが、その時にバプテスト派も1862年にロードアイランド州のプロビデンスにカレッジ・ブラウンを設立した。

22) ゲイツがロックフェラー2世と組んで最初に行った仕事は、ロックフェラーの外部への投資事業である鉱山関係を中心とした約20社の整理や立て直しであった。どの会社も赤字でつぶれかかった会社で13社もあったが、2人が中心となって立て直し、1902年には収益を上げた。ロックフェラーの鉱山投資のなかで、スベリアル湖付近の鉱山を所有するメリット家とロックフェラーとの間で所有権争いの訴訟事件があった。コンソリデーティッド・アイアン・マインズ社訴訟事件である。この件に関しては、唯一ゲイツがロックフェラーを擁護して書いた32ページのパンフレットがある。Gates (1897)。

23) 鮫島 (2011b) 136ページ。

24) 同上論文、137ページ。

み出そうと研究していたのである。そして、ロックフェラー家のフィランソロピーの精神はロックフェラー2世の6人の子供たちに引き継がれ、現在はロックフェラー4世の代に引き継がれている²⁵⁾。

この章をまとめると、ロックフェラーは厳格な什一献金を行うことや教会活動の経験を通じて、教会や慈善事業であろうとも、ビジネス活動と同様に収支の勘定が重要であり、厳格に処理すべきだと考えた。このことから、彼の信仰心は効率的に利益を追求する姿勢と結び付き、彼のこの信念はロックフェラー家のフィランソロピー活動に引き継がれた。また、同家の活動は教派等を越えて幅広く行われたことに注目すべきである。

3 バプテスト教会²⁶⁾と黒人教会

この章では、南北戦争の終結後から1890年頃までの南部におけるバプテスト総連盟(北部バプテスト)、南部バプテスト連盟(南部バプテスト)、黒人教会、黒人バプテスト教会(黒人バプテスト)のそれぞれの関係や状況について扱い、北部の資本家の援助、黒人の教育、黒人教会、黒人女性の役割などの面から説明する。3章は3節に分かれており、3.1ではアメリカ・バプテスト国内伝道協会²⁷⁾の活動を中心に、北部バプテストと南部バプテストの関係について、3.2では教会の分離に伴う黒人教会の設立と、限定的ではあったが、黒人による社会的な組織化や教育水準の向上への道を開いたことについて述べる。3.

25) ロックフェラー2世の5人の息子たち(ロックフェラー3世、ネルソン、ローランス、ウィンスロップ、ディヴィッド)が理事となり、1940年に資産額2億2,200万ドルでロックフェラー・ブラザーズ・ファンドが設立された。1954年に長女のアビー・ロックフェラー・モーゼも参加した。彼女の参加によって、基礎研究や専門分野を重視した従来の財団とは区別して、市民的アプローチで基金を運用し、女子の高等教育のプログラムを著しく発展させた。ロックフェラー4世はウェストヴァージニア州選出の上院議員でロックフェラー財団の理事である。ニールセン(1986)82-88ページ。

26) バプテスト教会とは、この論文において、北部バプテスト教会、南部バプテスト教会、黒人バプテスト教会を含むものとする。鮫島(2011b)125-130ページ。

27) バプテスト教会の初の全国組織として、1814年に外国伝道推進のためにバプテスト総連盟(the Baptist General Convention)が結成され、1832年にアメリカ・バプテスト国内伝道協会は国内伝道の推進のために設立された。両方とも任意加盟の連合体であるが教派内の分離勢力に影響されやすかった。エイミー(2004)52-53ページ。

3では、北部バプテストの黒人教育への援助活動は資金的にほかのどの教派よりもずば抜けており、黒人バプテストは彼らから援助を受けて、黒人の学校建設を行い、また、ほかの黒人教会を通じて自律的な黒人組織を生み出した。一方南部バプテストの黒人教育への取り組みは小規模で、黒人バプテストとほぼ完全に分離していたことについて説明する。

3.1 バプテスト教会とアメリカ・バプテスト国内伝道協会

1790年代から1840年代にかけての「第2次大覚醒」の時代のアメリカ合衆国においては、連邦政府の影響力が弱く、市場は全面的に開花するには程遠く、これらに対して宗教の力が優越していたといわれている²⁸⁾。アメリカ国内のキリスト教派の分布は変わり、メソジストとバプテストが1820年頃までにアメリカで最大の宗派となった²⁹⁾。バプテストの布教活動はとくに南部で広がったために、南部と縁の深いアフリカ系の黒人バプテストが多く誕生した。

南北戦争前の福音派的プロテスタントは政治的に弱体化し、奴隷制による南北分裂を引き起こす力はあったが、奴隷制の問題を解決する思考力も政治力も持ち合わせていなかった³⁰⁾。戦争が始まると、教会は人種差別と市場の急激な拡大という2つの大きな問題に直面するが、この問いに対しても答えを出す術を持たなかった。北軍の勝利も奴隷制の廃止も宗教の力ではなく、連邦政府の権力の拡大と大規模な工業力の総動員によって獲得された³¹⁾。

戦時中に勇敢さを示した黒人部隊があったが、終戦後は白人とアメリカ先住民³²⁾とのあいだの紛争に巻き込まれて西部に送られ、ブレインズ・インディアン

28) 最初の「大覚醒」は1730年代後半から始まり、アメリカ宗教史家は「大覚醒」を1次と2次に区別したが、ステファン・マリーニの社会人類学的な研究によれば、それをひとつの長いエヴァンジェリカルなリヴァイヴアルとして見做し、彼は「革命期リヴァイヴアル」と呼んだ。Marini (1982)。

29) 1776年のアメリカ合衆国の二大主流教派は、会衆派(20.4%)、長老派(19.0%)であり、1850年になると、それらに替って、メソジスト(34.2%)、バプテスト(20.5%)が台頭した。バプテストは南部に拡大することで二大教派となったのである。森本(2006)74ページ、第1表「教派勢力の変化」を参照。

30) Hill (2006) pp.8, 159-160。

31) ノール(2010)71-72ページ。

32) Native American や Indian は、「アメリカ先住民」、「インディアン」と訳出した。

と戦った³³⁾。結果的に戦争は終結しても、北と南が分裂し、白人と黒人も分裂した。

南北戦争の終戦直後に暗殺されたエイブラハム・リンカンの跡を継いだのが、南部のテネシー出身で元々民主党に属していたアンドルー・ジョンソンであった。ジョンソン大統領の南部の再建は、州の権利を重視しすぎたため、かつて南部連合の支配層であった白人の介入を招いてしまった。この「大統領による再建」を不満とする連邦議会内の共和党は、1867年に再建法を制定して南部を5つの軍事区域に分け、それぞれに軍の長官を置く連邦軍を駐留させて南部への介入を強化した。議会から任命された連邦機関である解放民局は教育部門で、500万ドルを費やし、南部で約50校の大学を設立して財政的に援助した³⁴⁾。

南部において、選挙権を与えられた黒人支持層と連邦支持者であるユニオニストを基盤とする共和党が成立して同党を政権とする「連邦政府による再建」(Reconstruction)が行われた。この再建は当初、積極的に連邦政府が南部への介入を行い、反抗する南部の白人勢力を連邦軍で抑え込んだ。連邦再建では戦後処理のために、すでに行われていた憲法修正第13条の人種による差別なしにすべての市民に公民権を保証する(1865年)に追加して、修正第14条のアメリカで生まれたすべての者にこれが適用される(1868年)、修正第15条のすべての成人男性に投票権を保証する(1870年)等の憲法修正がなされた。

南部の白人勢力は連邦再建に対して暴力で応じ、その一方で次第に彼らは民主党に集結した。1876年の選挙において、共和党は「連邦政府による再建」の終結に同意する代償として議会を制した。1877年に南部の白人勢力は連邦の再建

33) 4つの黒人部隊(第24歩兵連隊、第25歩兵連隊、第9騎兵連隊、第10騎兵連隊)が戦い、敵であるスー族、コマンチ族、ナバホ族等のインディアンから敬意を込めて「バッファロー・ソルジャー」と呼ばれ、1901年までインディアン・テリトリー(現在のオクラホマ州)の警備についた。Berlin, Reidy and Rowland, eds.(1982).

34) 1865年から1877年にかけて、解放民局は、ハーワード大学、フィスク大学、アトランタ大学、ハンプトン学院等を北部の宗教団体等と協力して設立した。フィスク大学出身のW・E・B・デュボイスはアメリカ黒人を学者や指導者として鍛錬する考えを持ち、E・F・フレイジャやK・G・ウッドソン等の黒人学者に道を開いた。

を停止させ、南部の「回復」³⁵⁾ (Redemption) を行って民主党政権を誕生させた³⁶⁾。

1877年以降の南部主導の「再建後」(post-Reconstruction)において、一種の小作制度であるシェアクロッピング制のもとで、旧プランターの白人地主から黒人は搾取された。1890年代半ばから、「ジム・クロウ法」³⁷⁾と呼ばれる人種隔離法によって硬直した差別関係に再編された。南北戦争後から1900年までのあいだ、アメリカ国民は憲法で保障されている権利の平等を放棄し、アメリカ黒人から憲法修正第13条、修正第14条、修正第15条を奪い、社会的に無保護の状態にして放置したのである。

福音のプロテスタンティズムの伝統のもと、教会はネットワークを駆使して数百万人の個人に対して活動を行っていたが、そのなかのひとつにバプテスト教会があり、それは南部と北部のバプテスト教会に分かれていた。北部バプテスト教会の連合体であるアメリカ・バプテスト国内伝道協会 (the American Baptist Home Mission Society) は活動し易いためか、それとも南部の白人に気を使っただけか、南北戦争中にローワーサウスやディープサウスよりも黒人奴隷の少なかったアッパーサウスの黒人バプテストへの働きを開始した³⁸⁾。1865年に国内伝道協会は65人の宣教師を南部に派遣して、解放後の黒人活動を支援した。そのことで南部の白人の間では、南北戦争前の北部バプテストとの奴隷制に関する苦い経験から北部バプテストの活動に対する疑念がまたもや生じた³⁹⁾。

35) ノールによると、南部における「リデムション (復古)」という言葉は解放された奴隷とそれに味方した共和党から南部白人の民主党へと暴力的に力を移すことを意味した。そして、「リデムション (復古)」の成功によって、人種差別と地方自治の組み合わせが、ニコラス・ルーマンが要約したところの「黒人の政治的強化と連邦政府権力」という組み合わせに勝利したのである。ノール (2010) 78 ページ; Lemann (2006)。

36) 岡林 (2005) 4-5 ページ。

37) 1896年の連邦最高裁のブレッシー対ファーグソン事件判決が、「ジム・クロウ法」と呼ばれる法律を認めた。ジム・クロウとは、黒く顔を塗った白人が踊る minstrel show の登場人物で黒人差別の総称。

38) ローワーサウス (ルイジアナ, ミシシッピ, アラバマ, ジョージア, サウスカロライナ, フロリダ, テキサス), ディープサウス (ジョージア, アラバマ, ミシシッピ, ルイジアナ, サウスカロライナ), アッパーサウス (テネシー, ヴァージニア, ノースカロライナ, アーカンソーの諸州)。地域によって州は重複する。

39) エイミー (2004) 83 ページ。

北部バプテストは南部バプテストと共同で解放後の黒人たちの地位向上、生活改善そして教育などの問題に取り組みたかったが、南部の人種的な差別問題から協力できなかった。そうしたなかで、アメリカ・バプテスト国内伝道協会の代表が、1868年の南部バプテスト連盟の総会に出席して黒人バプテストや黒人への伝道に協力し、支援を行う考えを提案した。しかし、国内伝道協会と南部バプテスト連盟の交渉の末、1870年に両者の協力は困難であるという結論に達した。その理由は主として3つ挙げられる⁴⁰⁾。

- ① 活動資金の大半を提供する北部バプテストと、それを制約しようとする南部バプテストの両者の立場の違いからである。
- ② 黒人に対する北部バプテストの考え方では、黒人を劣った人種であるとして⁴¹⁾白人の人種的な純粋性を堅持しようとする気質をもつ南部バプテストとの間の相違からである。
- ③ 南部バプテストは南部の白人から構成されており、南部の白人に対して肩を持ったためである。

アメリカ・バプテスト国内伝道協会は、南部バプテストからの協力を得られなかったが南部への活動を根気強く続けた。その結果、彼らの活動を危惧していた南部のリーダーたちも、次第に彼らに好意を持ち始めた。さらに注目すべきことに、南部バプテストのリーダーのひとりであったJ・L・M・カーリー⁴²⁾ (Jabez L. M. Curry, カーリーと略記)が国内伝道協会の活動をそれまでの敵

40) 同上書、70-83ページ。

41) アラバマの編集者であったエドウィン・T・ウインクラーの黒人の社会的地位についての見解、つまり、黒人は劣った人種であるから黒人への人種差別は必然的に生じるという見解。当時は黒人を劣った人種であるとする偏見は、南部だけでなく北部の人々にもあった。

42) カーリーはジョージア出身でジョージア大学からハーバード大学の法学部を卒業して、アラバマ下院議員、連邦下院議員、南部連合下院議員を務め、従軍、追放、特赦を経て、1865年からアラバマ州のハウォード・カレッジの学長であった。ウッドワードは、カーリーが1877年のヴァージニア議会で黒人の公民権に関する論争を傍聴したときに、自分の日記に、「黒人の議員は、彼や彼の人種が、その公民権や自由の保障を、『貧しい白人のくず』にではなくて、『成功した紳士』の庇護に依存していると語った」と云ったことに対して明らかな満足感をもって書き留めていたことを述べている。カーリーは黒人の連邦下院議員が公民権に関して、白人の間でも階級によって差異があることをよく知っていたことに満足したのである。ウッドワード(1977) 63-64ページ。

対視から正式に南部で認めたのである⁴³⁾。

カーリーはのちに初期の教育財団であるピーボディ財団の総代理人になる人物である⁴⁴⁾。ピーボディ財団については、ロックフェラー家のフィランソロピーにおいて、「寄付の技法」で欠かせない財団であり、同財団の詳細等については5章で述べる。1875年の南部バプテストの総会で、カーリーはアメリカ・バプテスト国内伝道協会に財的支援を呼び掛け、黒人たちへの支援を行うようにした。北部の宣教師たちはこれを機会に再度南部に進出した。1882年に国内伝道協会は、南部バプテスト連盟国内伝道局（HMB）の総数の3倍に相当する67名の北部の宣教師を南部に派遣した。国内伝道協会の総支出額は、HMBの総予算29,000ドルの3倍弱の85,000ドルであった⁴⁵⁾。

アメリカ・バプテスト国内伝道協会が積極的に活動することで、南部バプテスト連盟は長老教会派やメソジスト派の再結合のように北部バプテスト教会との再結合する道もあった。しかし、南部バプテスト教会は北部バプテスト教会と友好関係を維持しながらも、彼らとは別組織で活動することを「再建後」の1879年の南部バプテスト連盟の総会で決定した。

バプテスト派の再結合ができなかった理由として、コーブランド（2003）⁴⁶⁾は3つの要因をあげている。

- ① 1845年の同派の分裂時に南部バプテスト派は、数において北部バプテスト派よりも多かった。
- ② 南部バプテスト派の成長は、時が経つにつれて北部バプテスト派をはるかに上回った。
- ③ 南部バプテスト派の成長は南部長老教会派や南部メソジスト派とは異なり、北部バプテスト派を無視し、または軽視し、南部の独自性を保持しようとした。

43) Noble (1969) pp. 409-410.

44) Knight (1969) p. 389 ; Noble (1969) p. 424.

45) エイミー（2004）82ページ。

46) コーブランド（2003）34-35ページ。

南部バプテスト派は、南部長老教会派や南部メソジスト派のように再結合しなかった。その頃、解放された黒人の手で設立された黒人教会は休憩や娯楽の場となっており、黒人の教育問題等に取り組んでいた。黒人教会は黒人社会の中心的な組織となりつつあった。

3.2 教会の分離と黒人教会

白人と黒人の分離に伴う教会の分離が行われる以前から⁴⁷⁾、南部の白人は黒人が教会の社会的、事務的な行事に参加することを決して容認しなかった。そのことに対して黒人側は不満を抱いていたが、奴隷として教会生活に参加し、白人と一体化しようとはしなかった。しかし、ブルー・ヴェインズと呼ばれる裕福な中流黒人層等は同じ礼拝に参加することで白人世界に引き入れられ、カラー・ライン⁴⁸⁾を越えようとした。

南部では1820年頃から、黒人暴動⁴⁹⁾の増大に対応して、黒人の宗教や教育目的での集会は禁止されていたが、南北戦争後の教会の分離によって黒人の集まりや黒人教会を監視する白人がいなくなり、黒人たちは奴隷制時代の支配体制から解放された。そのことがきっかけとなって、黒人教会内での黒人たちは黒人同士の対立を繰り返しながらも、貧しい信徒への援助や黒人の教育問題などに取り組み、黒人社会で大きな役割を果たした。また、1840年頃から、国内の奴隷人口のなかで、黒人女性の数が男性数を上回ったことは、女性が家族の形成に果たした役割を筆頭に、黒人教会、黒人教育等に重要で

47) 18世紀の中ごろまでの黒人奴隷の宗教に対する奴隷主の態度は、奴隷たちが反抗的でない限り、放任されていたが、19世紀になる頃には、彼らは奴隷たちを社会統制するための道具として宗教を使っていた。1700年代には、南部で国教会の外国福音伝道団が黒人奴隷への伝道を開始していた。ローウィック (1986) 52-53 ページ；大宮 (2006) 59 ページ。

48) カラー・ラインとは皮膚の色による差別が歴然と存在するなかで、見えざる人種の境界線を指すものである。カラー・ラインは見えない境界線ではあっても、それを越えるのは非常に困難であった。

49) 南部における黒人暴動として、1800年のガブリエル・ブロッサーの反乱、1822年のデンマーク・ヴィージーの反乱、1829年のデビッド・ウォーカーの反乱、1831年にバプテスト派の奴隷牧師であったナット・ターナーの反乱がある。

あった⁵⁰⁾。

黒人教会の起源は、奴隷宿舎を基礎とするアフリカ系アメリカ人が現世を逃避して来世に希望を持てるように白人から独立し、同宿舎の部屋やあずまや教会⁵¹⁾で夜遅く、自主的に祈祷集会や霊歌会など宗教活動を行った。黒人教会は牧師を中心とする宗教家族であった。それらが奴隷解放後に、黒人教会を次々と誕生させる土台となった。黒人コミュニティーから優れた指導者が多数出て、自ら黒人の牧師となって黒人教会を誕生させた。解放後の黒人は実質的に政治の世界や労働社会から除外された。そのために彼らの気持ちは、元々伝統的な希望の場所であった教会に向くようになり、教会の再評価へと繋がった。

1863年の奴隷解放宣言後の南部バプテストの諸教会では、北部の影響下に陥らないために黒人会員を保持しようと、彼らに対して家父長主義的支配の継続を試みたが、南部の白人支配はうまくいかなかった。南部バプテストは次第に黒人会員の自発的な移動を承認し、教会の分離をむしろ奨励した。教会の分離は白人支配から逃れたかった黒人にとって、白人との衝突を避けることができ、自由に振舞えるものであった。南部バプテストはこの黒人自らの教会の分離を神の摂理の行為であると、再三にわたり、表明してそのあと押しを行った⁵²⁾。

教派別に見ると、まず、アメリカ黒人メソジスト教会が南部メソジスト監督派教会から分離し、南部の黒人長老派教会も南部長老派教会から分離した。1870年代に3分の2以上の各々の黒人教会が黒人たち自身で設立された⁵³⁾。カトリック教会は、黒人への布教が1870年過ぎと遅かったことやルイジアナ州で黒人が多数派を占めたために、1896年の連邦最高裁が人種差別を合法化した

50) 黒人の父親が全員ではないが、労働力として手放さないために子供に教育を受けさせなかった半面、母親は子供の教育を望んだ。ローゼンガートン（2006）73-75ページ。家族の形成における女性の役割と女性たちが宗教や同種の活動において重要な役割を果たしたことについては、ローウィック（1986）61、116-141ページ；フレイジャ（1972）14ページ。

51) あずまや教会（arbor church）とは、神秘的で呪術的な場所で一群の樹木に覆われた野外の集会場などを指し、北部と南部では状況が異なっていた。

52) コーブランド（2003）44-45ページ。

53) クォールズ（1994）200ページ。

レッシー対ファーガソン事件判決⁵⁴⁾まで教会の分離を行わなかった。この判決は、アメリカ黒人が中等教育を受けてはいけないという法律上の根拠となった。

黒人教会は黒人にとって、差別社会からの安息の場所になったことで、ビジネスなどの情報の提供場所となり、黒人がリーダーシップを発揮できる唯一の場所となった。黒人教会は貧しい信徒への援助を行い、子供や若者にキリスト教と読み書きの教育をする学校の役割も果たし、急速に黒人社会の中心的な組織となった。そのなかでも、北部の資本家から資金・人材援助を受けられるような組織された黒人バプテスト教会は学校建設を行った。

ここで簡単にアメリカの公教育と南北戦争前後の南部の黒人の公教育について触れたい。アメリカの教育は伝統的に地域性が強く、地方に権限があり、基本的には連邦政府はこれに関与しないという伝統がある。南部植民地は主として英国国教会の信者が多数を占めており、植民した人々は一般的に利益を求めて植民した人々で、ほかの植民地ほど宗教的な動機は強くなかった。植民地時代の人々には初等教育、中等教育の概念はなく、「プランター」(planter)と呼ばれた大農園主などの上流階級には子供に家庭教師をつけて教育をさせ、子弟を英国本国に送って教育を受けさせるものもいた。

南部の金持階級は公教育にほとんど価値を認めなかったために、白人の公教育も普及しなかった。黒人の公教育については、1816年にジョージア州ウイلمントンにウイلمントン奴隷制廃止協会が最初の黒人学校を設立したが、黒人への教育はそれまでないに等しく、奴隷制自体が巨大な教育制度であった⁵⁵⁾。

南北戦争の終結前に南部諸州は、奴隷制を廃止する規定である憲法修正第13条を批准したが、戦前同様に黒人の公教育はないに等しかった。奴隷解放後の黒人たちは積極的に教育の機会を求めたが、南部における教育の発展は

54) この判決における“Separate but Equal”の原則の適用を白人社会も黒人社会同様に受けることになった。別の角度からみて、一例をあげると、州内に白人専用のグラント大学がある場合、黒人向けの同大学を設立して、同等ではないが補助金を分けて使えば良いことになった。そのことで黒人の高等教育が促進されて、同じ人種内で男女共学が進んだ。宮田(2009)58ページ。

55) Beale (1978) p. 116.

南部の力だけで決まるものでなく、資金・人材共に北部の影響力が大きかったということに注目すべきである⁵⁶⁾。

当時の南部の議会は黒人教育に対してどのような立場をとったのだろうか。南部における黒人教育に関する教育法規は、テキサスとジョージアの2つのタイプに代表された。テキサスでは、1866年に改定した州憲法のなかの教育に関する条項には、黒人教育の推進を議会の責務としながら、黒人の公教育の維持について、黒人からの徴収される税金のみで賄うという内容であった。ジョージアでは同年の教育に関する条項のなかで、無償の教育の対象を白人と規定し、統合学校（mixed school）については何も触れてもいなかった⁵⁷⁾。

黒人が多数派を占めていたルイジアナ州の一部を除いて、南部の学校は白人と黒人の分離学校（separated school）であった。公立学校はもちろん、私立学校でさえも、統合学校は大多数の南部白人の攻撃対象であった。ピーボディ財団も活動するうえで統合学校に反対した。南部の公教育が、長期間に及び停滞した最大の原因は、南部の貧困にあった⁵⁸⁾。公立学校は人種差別に伴う統合学校の問題などによって、1877年から1900年頃までのあいだ、ほとんど発展しなかった。この貧困こそが、南部の人種差別や児童労働の問題にも影響を及ぼした。児童労働の問題は小作や自営の農業だけでなく、工業化のなかで、5章でも触れるが、極めて顕著な社会現象となる。

南部では、貧困が蔓延しており、白人・黒人教会を問わず、深刻な資金不足に悩んでいた。そのなかでも、黒人教会の資金不足は絶望的な状態で聖職者に給与を支払うことさえできなかった。教会の学校も一般的に深刻な資金不足であったが、19世紀の終わる頃に、黒人の学校に対して2つの資金提供者が加わった。ひとつは南部の州政府であり、もうひとつは北部の博愛主義

56) 再建時代に北部からカーベットバックカー、北部の資本家たち、学校の校長たちが南部にやってきたという言葉がある。

57) 世界教育史研究会（1975）206ページ。

58) 1860年当時の南北の全財産（奴隷の労働価値を含む）は55億ドルであって、アメリカ全体の資産額120億ドルの半ば近くであった。19世紀末の南部の課税資産額は、北部と西部を合わせた5分の1から6分の1程度であった。Knight (1969) pp. 377-378.

者が設立した教育財団であった。黒人自身や教会が行った学校に関する活動が公教育の強化となり、新興の実業家や中産階級が教育優先の舵を取った。

黒人教会は、バプテスト教会、メソジスト教会、ディサイプル教会⁵⁹⁾と同様に明確な意思をもって宗教的自由を奉ずることでアメリカにおいて繁栄した。南部において、農業機械が普及することで黒人の労働力の余剰が生まれ、そのことで黒人の北部移住が増大して微妙な人種差別が起り、結果的に黒人教会が成長することになった。

南北戦争後から1900年までのあいだ、アメリカ国民が憲法で保障されている権利の平等を放棄し、黒人を社会的に無保護の状態にして放置した。そのような状況もなかで、黒人は教会の分離によって黒人教会を誕生させ、限定的ではあったが、黒人による社会的な組織化や教育水準の向上への道を開いたのである。

3.3 黒人バプテスト教会と南部バプテスト教会

この節では、北部バプテスト教会の黒人教育への活動は、資金的にも人材的にもほかのどの教派よりもずば抜けており、黒人バプテスト教会は北部の資本家から援助を受けて、黒人の学校建設を行い、また、ほかの黒人教会を通じて自律的な黒人組織を生み出した。一方で南部バプテストは産業社会における農業問題を理解せず、黒人の教育活動も小規模で黒人バプテストとほぼ完全に分離していたことについて説明する。

黒人バプテスト教会の活動は、南北戦争以前から南部の主要都市のほとんどで見られていた⁶⁰⁾。南北戦争後の同教会の最大の支援者は、黒人を除いて

59) ディサイプル教会は1810年にアメリカ合衆国で創始された復古的な宗派で、シカゴ大学神学部が設置されると、北部のバプテスト派と同様にこの神学部を教職養成の学校に指定した。大宮(2006)173ページ。

60) 解放奴隷のジョージ・リール(George Leile)はアメリカの独立戦争以前にバプテストの牧師として認められて、オーガスタ近郊のアメリカ初の黒人のバプテスト教会であるシルバープラフ教会で牧師を務めた。リールのもとで回心を行ったアンドルー・ブライアン(Andrew Bryan)は1788年に当局から許可を得て、サバンナ第1アフリカン・バプテスト教会を設立した。ウィリアム・モーゼス(William Moses)は、ウィリアムズバーグ・アフリカン・バプテスト教会を設立した。フレイジャ(1972)47-48ページ。

アメリカ・バプテスト国内伝道協会を通じて活動を行った北部バプテストの資本家たちであった。終戦後に開始された同教会の黒人の教育活動は、1879年に専任の教育監督者が必要になぐらいまでに拡大された。1882年の段階で同教会は、国内伝道協会に対して12の黒人学校のために78人の教師を要請した⁶¹⁾。因みに1882年のロックフェラーの什一献金は6万ドルを超えており⁶²⁾、彼は黒人の女子大学としてアトランタにスペルマン大学を設立した。

1894年までの黒人バプテスト教会の教育活動において、北部バプテスト教会は合計27の初等・中等レベルの黒人学校及び9校の黒人大学の設立に協力して、在籍する黒人生徒数約5,000人、教師数約153名であった。国内伝道協会の年間経費は10万ドルに達していた。一方南部バプテスト教会の黒人教育への取り組みははるかに小規模であり、黒人バプテストと完全分離していた。北部バプテストの同教育への活動は、ほかのどの教派よりも資金・人材援助にずば抜けていた。黒人メソジスト教会も黒人バプテスト教会と比較すると、小規模ながら同様な活動をしており、北部のメソジスト教会の白人信徒から援助を受けていた⁶³⁾。

クォールズ(1994)⁶⁴⁾は当時の黒人バプテストと南部バプテストの分離状況について、「1866年に黒人バプテスト派信徒は、南部の大西洋側の州であるサウスカロライナ、ジョージア、フロリダで連盟を結成し、14年後に南部全体の黒人バプテスト教会が加わった大会が、アラバマ州モントゴメリーで開催された。1880年までに白人と黒人バプテストは、南部で完全に分離した」と述べている。

そして、エイミー(2004)⁶⁵⁾によると、黒人バプテスト教会の組織力について、1882年に黒人バプテストの数は80万人に達し、南部諸州で州連盟を

61) エイミー(2004)84ページ。

62) Nevins(1953)vol. 2, p. 479.

63) エイミー(2004)84ページ。

64) クォールズ(1994)200-201ページ。

65) エイミー(2004)80ページ。

組織して、8紙の宗教新聞を発行するまでになった。1886年には、黒人バプテスト教会による初の全国組織になるアメリカ全国バプテスト連盟 (the American National Baptist Convention) を設立したと述べている。

この2つのことから、黒人バプテスト教会は南部バプテスト教会からほぼ完全に分離し、一方では国内伝道協会を通じて北部バプテスト教会と協力しながら連携して学校建設を行った。同教会は黒人信徒に読み書きとキリスト教教育を施し、低コストで済むような宗教新聞雑誌等を媒体として同教会の組織を創った。黒人バプテストはほかの黒人教会と積極的に交流を図り、自立的な黒人組織を生み出して黒人社会での宗教的な発言力を強くしていった。

南部バプテストのリーダーたちは人民党⁶⁶⁾よりも民主党の超保守派寄りであった。しかも彼らは地方で生まれても、成長してからは都市や町の有力教会で生活を送ったために、農民の運動家よりも事業家や銀行家に親しみを感じていた。牧師たちは農業問題をピューリタンの社会倫理に当てはめて扱い、農民の性格的な欠陥に結び付けるなどして産業社会における農業を取り巻く状況を全く理解していなかった。

南部バプテストはアンドルー・カーネギーやロックフェラーなどのようにビジネスで成功して慈善家に転身した人々の奉仕活動とその精神を賞賛した。南部バプテストの定期刊行紙が、資本家や富の集中がもたらす弊害を批判することや政府による企業優遇策を非難するのは稀であった。そのなかで、ノースカロライナの新聞編集者であったJ・W・ベリーは、労働条件の改善やトラストの規制を支持して大企業の批判を繰り広げた。また、彼はロックフェラーから「汚れたお金」を受け取ったとして同州のバプテスト校を批判した。

この章をまとめると、「連邦政府による再建」を覆すなど南部での白人教会の政治的な影響力は大きく、また一方では教会の分離に伴う独立する黒人教会が増えたことで限定的ではあったが、黒人による社会的な組織化や教育向

66) 人民党は1880年代から1890年代にかけて農産物の取引が世界市場に組み込まれ、輸送の独占化などによって農民の収入が大きく変動し、彼らの生活が困難になったことに対して運動を行った。

上への道を開いた。1840年ころから、奴隷人口のなかで、女性の数が男性数を上回ったことも影響して、黒人たちが積極的に教育の充実を求めたことが重要である。南部の貧困のなかで、北部バプテストの黒人教育への援助はほかのどの教派よりも資金・人材面でずば抜けており、黒人バプテスト教会は学校建設を行い、また、ほかの黒人教会を通じて自律的な黒人組織を生み出した。一方南部バプテスト教会の黒人教育への取り組みは小規模であり、黒人バプテスト教会と完全分離していた。これらの南部の置かれた状況、バプテスト教会内の関係や黒人教会の設立などが、黒人教育の向上のためにロックフェラー家の GEB 設立を促したのである。

4 The University of Chicago の設立

バプテスト派において、拡大し発展する新たな外国への宣教の熱意に由来した部分が大きかったために高等教育への関心が高まっていた。この章では、同派の高等教育のための新しいカレッジの設立要請をバプテスト教会から受けていたロックフェラーが、ゲイツ、ハーバー、そしてアメリカ・バプテスト教育協会の3者と協力し、どのようにユニヴァーシティー・オブ・シカゴ(The University of Chicago, シカゴ大学)を設立したかを説明する。また、同大学の設立が GEB 設立の歴史的前提のひとつであったことも明らかにする。

南北戦争時代以前まで遡ると、シカゴは地下鉄道の拠点で奴隷制度に反対した町 (antislavery town) であった。また、シカゴは 1871 年に大火災 (Great Fire) で廃墟となりながら、1 世代後には再建を成し遂げて、人口も 1870 年の約 30 万人から 1880 年の 50 万人超まで回復した偉大な精神と気質を備えた大都市である。そのシカゴにおいて、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴ⁶⁷⁾ は、1889 年から開始されたロックフェラーの巨額な寄付、シカゴの名望

67) 1856年に最初の男女共学制のハイスクールが開設された翌年に、バプテスト教会の信者であったスティーブン・A・ダグラスによって小規模なシカゴ・カレッジは創立されたが、財政難の理由から、閉鎖状態であった。

企業家⁶⁸⁾である富豪たちからの寄付金とシカゴ市からの助成⁶⁹⁾を受けて、バプテスト派の総合的な高等教育機関として設立された。同大学は、シカゴ万国宗教学議⁷⁰⁾の開催される前年度の1890年に博覧会の開催地近くに建てられた⁷¹⁾。

1896年に、ジョン・デューイの実験学校⁷²⁾であったユニヴァーシティー・オブ・シカゴの付属小学校の開設などの後ろ盾となったウィリアム・レイニー・ハーパー (William Rainey Harper, 1856-1906) が、同大学を運営した。ユニヴァーシティー・オブ・シカゴは、1867年にメリーランド州ボルティモア市に創立されて大学院大学の先駆的存在となった。ジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) と並んで、アメリカではハーパーの理想とする研究志向の大学と見做された。ユニヴァーシティー・オブ・シカゴの設立当初から1910年までの間、ロックフェラーの寄付の総額は3,470万2,375.28ドルに達した。同大学とロックフェラーの仲介役を行ったのが、アメリカ・バプテスト教育協会の書記であったゲイツであった。同大学の設立は、ロックフェラー、ハーパー、ゲイツと同教育協会の4者が中心に協力して成し遂げられた⁷³⁾。

68) シカゴの名望企業家として、アーマー家、マコーミック家、ローゼンワルド家、インサル家等といった財界指導者であった。マコーミック家とロックフェラー家は姻戚関係にある。ロックフェラーの末娘イーディス・ロックフェラーとハロルド・マコーミックは、1985年11月に結婚した。ハロルド・マコーミックは刈取り機で有名なマコーミック社のちのインターナショナル・ハーベスター社 (Chicago) のサイラス・マコーミック (Cyrus McCormick, 1809-1884) の息子である。熱心な長老派教会の信者であったサイラス・マコーミックは、長老派の教会とその神学校に50万ドルずつ合計100万ドルの寄付をして、南部復興のために寄付やローンも行った。メリアム (2006) 119, 220 ページ; チャーナウ (2000) 上, 120-128 ページ。

69) 1916年までにシカゴ市はシカゴ大学に対して800万ドルに相当する土地と建物を提供した。

70) この会議によって、世界の諸宗教が思想と実践において、親密な関係を作り出す目的で、1894年5月にThe First American Congress of Liberal Religion Societiesを設立。シカゴ大学やコーネル大学は20世紀初頭から比較宗教学の本格的な研究を行った。森 (1997) 1-26 ページ。

71) シカゴ大学が万国博覧会開催地近くに建てられたことや万国博覧会に費やした準備は、アメリカ大陸発見から400年を記念した開拓者精神、都市精神 (city-spirit) の具体的な表れであり、これらの精神は1907年のシカゴ都市計画 (city-plan) において花開いた。メリアム (2006) 12-13 ページ。

72) 実験学校は新しい教育の理論や思想を実験的に試み、この研究を普及させる目的で設立された学校。19世紀にドイツのペスタロッチの学校で始まった。小柳 (2010); デューイ (2005)。

73) The General Education Board (1915) p. 6.

1880年代半ば頃から、ロックフェラーはバプテスト派の高等教育のための新しいカレッジの設立要請をバプテスト教会から受けていた。同派の高等教育への関心は、新たな外国への宣教の熱意に由来した部分が、大きかったためだと思われる⁷⁴⁾。そして、新しいカレッジの設立場所として、ニューヨークとシカゴ案が浮上していた。ニューヨーク案はロチェスター神学校のオーガスタス・H・ストロング博士⁷⁵⁾が尽力し、もうひとつのシカゴ案については、バプテスト統一神学校の書記であったトーマス・W・グッドスピード博士が尽力していた。

1889年にその様子をじっと窺っていたロックフェラーは、バプテスト教会の要請を受け入れた。そして彼はゲイツと相談しながら、ストロング博士、グッドスピード博士の各々と交渉を重ね、新しいカレッジの設立場所として、シカゴを選んだ。彼がシカゴに決めた理由のひとつにグッドスピードの方がストロング博士よりも忍耐強く、建設費のコストなどについて効果的な陳情を行ったことを挙げられるが、最大の理由はグッドスピードの口から、学長候補にハーパーの話題がでたことであった。ロックフェラーの長女エリザベス・ベッシー・ロックフェラーがヴァッサー大学に在学中に、ロックフェラーはエール大学から講義に来ていたハーパーと出会い、それ以来、ハーパーに注目していた⁷⁶⁾。

ハーパー博士は32歳とまだ若いバプテスト派の信者で、イエール大学にお

74) バプテスト派の高等教育への原点は、Congregationalistへの改宗を目的とする宣教師としてインドへ赴任したルーサー・ライスが、その航海途中でバプテストに改宗して、彼がアメリカ合衆国に帰国後、南部を旅したことに由来する。彼が南部を旅したあとに5つのカレッジができ、そのなかのひとつがジョージ・ワシントン・ユニヴァーシティであり、そして外国宣教の関心は「伝道問題検討協会」(1811年にアンドーヴァーにおいて同胞団協会に設立された)という学生組織に引き継がれ、19世紀の半ばころから、Congregationalist、バプテスト、アメリカのカレッジの宗教生活に影響をあたえていたためである。また、1905年にCongregationalist派の年次教会大会においてロックフェラーの寄付について「汚れたお金」について論争が起きており、3章の3節で触れたノースカロライナの編集者であったJ・W・ペーリーは、ロックフェラーから「汚れたお金」を受け取ったとしてバプテスト校を批判した。

75) ストロング博士は元クリーヴランド・ファースト・バプテスト教会の牧師を務めた人物で、1872年にロチェスター神学校の校長に就任した。

76) 圓城寺 (1939) 243-244 ページ。

いて3つの教授職をもち、ヘブライ語を研究していた。彼は大学界を席卷する、信じられないような才能の持ち主であった。また彼は努力を惜しまず、精神的に行動して自分の考えを貫き、スタンダード社社長のアーチボルドのようにロックフェラーが好む人物でもあった⁷⁷⁾。

ロックフェラーとゲイツが相談して教育協会が了承する形で、ハーパーが学長に選ばれた。1890年から1906年にかけて、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴがハーパー学長の「攻めの経営」のもとで形成されていくのである。ハーパーは、ロックフェラーとシカゴの名望企業家である富豪たちを同大学の設立ために友好的に競争させながら、彼らの支持を集めた。シカゴの富豪たちをもってしてもロックフェラーの財力を凌ぐことはできなかったが、この件に関して非公式な合意が成立した。それによって、1916年までにシカゴ市は800万ドルに相当する土地と建物を提供した⁷⁸⁾。

そしてさらに、ハーパーが最初の教授陣の採用を1891年の末から開始すると、彼はさらに多額のお金を必要とした。彼は、ロックフェラーが納得するような精密な明細書を書き、ゲイツに渡して200万ドルを要請した。ゲイツの電報を受け取ったロックフェラーは、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴの設立で上限だと考えていた60万ドルに、新たに第2次の200万ドルを追加した。それから、90日後にシカゴの富豪たちも、さらに100万ドルを寄付することで応えた⁷⁹⁾。

ロックフェラーとシカゴの富豪たちの寄付を中心に集まったお金は、ハーパーが教授を採用するために東部に行ったときに、彼の目的を達成させるのに多いに役立った。ハーパーがより多くの教授や建物を望むことで、そのた

77) ハーパー学長の仕事ぶりや彼の情熱について、ハーパーは事務方との早朝会議を始めるときには、「これから40の議題について話をします」と宣言した。また彼は1906年に50歳で亡くなったのであるが、医者に癌だといわれてから、余命18ヵ月で5冊の本を書き遺した。ちなみに、ジョン・アーナボルドは北部バプテストの信者であり、彼の父親はメソヂスト教会の牧師であった。Goodspeed (1916) pp.1, 133, 144, 410.

78) ルドルフ (2003) 324-325 ページ。

79) Goodspeed (1916) pp.178-188, 273-296.

めに、より多くのお金を必要とした。そしてシカゴで素晴らしいことが起きているという噂が全米に広がって、ハーパーの手元には、あらゆるところから、教授職への願書が届いたのである。

ハーパーの教授陣に対するスカウトは、ウェルズレー・カレッジのアリス・フリーマン・パーマーを含め8人の元学長や神学校学長を集め、イェール大学からは5人の教授を引き抜いた。さらに彼は、クラーク・ユニヴァーシティーから、フェロー、講師、15人の教授陣を含むアカデミックな教員を引き抜いて、シカゴに連れて来た。ハーパーは集められた一流の教授陣に対して、競争原理に基づいて、一流の研究条件を用意した⁸⁰⁾。

ハーパーの教授陣に対するスカウトについて身近でみていたゲイツは、その素晴らしさをロックフェラーに手紙で書き送っている。その内容とは、「わたしは驚きの目で、教授陣が毎月大きくなっていくのを見ています。……このことに対して、私は畏敬の念をもって立ち尽くしています。その素晴らしいやり方のなかに神が居られます」という驚嘆を隠せないものであった⁸¹⁾。

ハーパー学長は、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴの設立というバプテスト派の新時代のための高等教育の事業に対して「攻めの経営」を行い、資金不足のために計画通りに上手く事は運ばないだろうと非難した東部の人々たち全員を圧倒した。ハーパーは初年度の1892年に、教授職の給与80人分の予算で120人の教授を雇った。同年10月1日、ハーパーは同大学にアメリカの33の州と15の外国から、328人の学部生、210人の大学院生、204人の神学生を集めた。ロックフェラーの1892年の献金は約135万ドルで、1882年の22倍であった⁸²⁾。

ユニヴァーシティー・オブ・シカゴの設立と共に神学部が新設された。同大学神学部は教派によって設置されなかったことで、ニューヨークのユニオ

80) ルドルフ (2003) 325 ページ。

81) Goodspeed (1916) pp. 180-181, 195-217.

82) Nevins (1953) vol. 2, p. 479.

ン神学校と並んで自由主義的な雰囲気であった。神学部は北部のバプテスト派やディサイプル教会の教職養成の学校に指定されて、ユニオン神学校と共に「モダニズム」⁸³⁾と呼ばれる神学の牙城となり、セツルメントなどの慈善事業を行ったりして大都会のなかで神学を研究した。

ハーパーはシカゴ大学を新しい時代の高等教育を担うアメリカのユニヴァーシティーのモデルにするために、建物や設備のためにシカゴの不動産をブロックごとにも買取するようなハードの面だけでなく、教育や研究のためのソフトの面にも気を配った。彼は、多感な学生たちが能率的かつ効果的に教育や研究に没頭し、秩序ある学生生活を送るために、ソフト面において、①学期、カリキュラム、履修方法などへの新しいシステムを導入、②学術的ヒエラルヒーと学部化 (Department) の導入、③教育のための雰囲気や伝統を創り出すことの3つを実施した。これらについて以下に触れておく。

① 学期、カリキュラム、履修方法などの新しいシステム導入

新しいユニヴァーシティーのモデルは、1年の12カ月を4学期に分けて、学生に最低3学期、あるいは短期集中的に4学期のカレッジを取らせることとした。ユニヴァーシティーは、4年制のカレッジを同じ長さの2つの部分に分けた。前半部分は、ジュニア・カレッジもしくはアカデミック・カレッジと呼ぶようにして、その内容は教養的なものであった。後半部分は、シニア・カレッジもしくはユニヴァーシティー・カレッジと呼んで、その内容は専門的なものであった。ユニヴァーシティーは、専攻科目をメジャーとマイナーのシステムに分けて、学生がひとつの科目を深く研究する一方でもうひとつの科目にそれほど時間をかけずに済むように勉強することを認めた⁸⁴⁾。

② 学術的ヒエラルヒーと学部化 (Department) の導入

シカゴ大学はカレッジからユニヴァーシティーになることで、規模の拡

83) モダニズムとは、19世紀のドイツ自由主義神学の影響を受けて、近代の規範のなかでキリスト教の信仰を捉えようとする考えである。大宮 (2006) 170 ページ。

84) Goodspeed (1916) pp.190-194, 242, 264.

大に伴う知識の細分化による統一と権威の保持が必要なために、学術的ヒエラルヒーと学部化（Department）の導入という試みをおこなった。1891年にハーパーは、シカゴ大学に5段階からなる学術的ヒエラルヒーを導入した。1番下に、時間にして6分の1だけを大学に奉仕するフェローを置いた。その上に、ほとんど変わりはないが、機能的に分けられた若者たちとして、リーダー、レクチャラー、ドゥーセント、アシスタントが置かれた。その上に、2年契約のアソシエイト、3年契約のインストラクター、4年契約のアシスタント・プロフェッサーを置いた。さらにその上に、3段階の永久雇用からなる、ヘッド・プロフェッサー、プロフェッサー、アソシエイト・プロフェッサーが置かれた。それと共に学部化の概念も導入された⁸⁵⁾。

③ 教育のための雰囲気や伝統を創り出すこと。

歴史家の Nevins (1962)⁸⁶⁾ は、新しいユニヴァーシティーがキャンパスのアイデンティティとレジティマシー（legitimacy）の両方を獲得する方法について、多感な学生たちの教育において大きな役割を果たす雰囲気、伝統、ある種の過去の感覚を創り出すことを困難な責務のひとつとして挙げている。

ハーパーは、雰囲気や伝統がある種の過去の感覚を創り出すことで多感な学生たちの教育に欠かせない存在であり、大きな役割を果たすことに気づいていた。そのために彼は、都会型のシカゴ大学が新しくなればなるほど古く見えるように、自ら心を砕いて、設計、建設、電気工事、造園業者などに指示した⁸⁷⁾。

ハーパーはユニヴァーシティー・オブ・シカゴを新しいユニヴァーシティーのモデルにするために、学期、カリキュラム、履修方法などに思い切った新しいシステムと学術的ヒエラルヒーの導入を行った。まだ、そのころ、アメ

85) *Ibid.*, (1916) p. 136.

86) Nevins (1962) p.82.

87) シカゴ大学における学生寮内での学生生活、学部生の食堂の運営へ学生が参加する伝統づくりや強いフットボールチームを編成するための伝統づくりについて。Goodspeed (1916) pp. 144-145, 255, 266, 346.

リカのユニヴァーシティーには同大学のような組織をもつヒエラルヒーは存在しなかった。また、ハーバーは、大学の持つ雰囲気や伝統によってある種の過去の感覚を創り出されることで、多感な学生たちの教育に欠かせない存在になると気づいていた。そのために、彼はユニヴァーシティー・オブ・シカゴの景観を古く見えるように取り組んだのである。

ユニヴァーシティー・オブ・シカゴはハーバーが希望した野心的な研究大学であり、一流の専門家や研究者を必要とするロックフェラー家のフィランソロピーにおいて欠かせないものとなった。同大学は教育学部において中等教育の分野で力を発揮することとなり、GEB 設立に欠かせない存在であった。1890年代頃から、ヴァンダービルト大学のジェームズ・H・カーランド学長が中心になって、テューレン、デューク⁸⁸⁾、エモリを含む発展途上にあった南部のユニヴァーシティー運動を展開し始めていた。

この章をまとめると、バプテスト教会から同派の高等教育のための新しいカレッジの設立要請を受けていたロックフェラーは21年間、約3,500万ドルの寄付を行った。ロックフェラー、ゲイツ、ハーバー、アメリカ・バプテスト教育協会の4者が中心となり、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴは新しい時代のアメリカのユニヴァーシティーのモデルとして設立した、研究大学となった。同大学はロックフェラー家のGEB 設立への欠かせない存在となるのである。

5 The General Education Board 設立の歴史的前提

5.1 初期の教育財団と南部教育財団

ロックフェラー家は南北戦争後から、バプテスト教会やピーボディ財団等

88) 1838年にメソジスト教徒とクエーカー教徒によってノースカロライナ州のダーラムにユニオンカレッジとして設立され、1859年に財政的に行き詰まったためにメソジストとの関係が強化されてトリニティカレッジになり、1924年にデューク財団から600万ドルの寄付を受けてデューク大学となった。煙草王と呼ばれ、同大学に名前を変更したジェームズ・B・デュークはロックフェラーをビジネスマンとしても慈善家としても尊敬していた。宮田(2009)110-112ページ。

に献金を行うことで南部に影響力を及ぼしていた。また、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴ設立後も、同家の財産は凄い勢いで増え続けていたロックフェラー家はそれらのこともあり、バプテスト教会と北部の実業界の指導者たちの支援を受けた南部教育会議からの要請を受けて、GEBの設立へと集約されていくのである。

1866年頃から、北部の資本家たちはピーボディ財団などの初期の教育財団を通じて、彼らの影響力を南部に及ぼしていた。ロックフェラーやほかの企業家たちは南部での農業や鉱工業の生産において、黒人の労働力が企業の高い利潤性を維持するために重要であることを次第に気づき始めていた。南部は東北部や中西部の工業諸州に対して、新移民⁸⁹⁾の次に安い労働力を供給する源泉であり、北部の好景気を支える存在であった。

ロックフェラー家の寄付やフィランソロピー活動は教派を超えて、メソジスト教会、クエーカー教徒、カトリック系、黒人教会へと協力して幅広く行われた。同家はピーボディ財団などの教育財団を通じて寄付を行い、1903年のGEBを設立後も「寄付の技法」として、スレーター・ピーボディ財団やジーンズ財団を通じて南部の活動をしたのである⁹⁰⁾。①ピーボディ財団、②スレーター財団、③ジーンズ財団の設立や活動等について以下に説明する。

① ピーボディ財団

ピーボディ財団は、G・ピーボディ（George Peabody, 1795-1869, マサセチューセッツ出身の実業家でロンドンにも銀行を設立）によって、南部の教育振興のために1866年に設立された。同財団のファンドは、1869年の寄付を加えると約350万ドルであった。ピーボディ財団は、B・シアーズ牧師⁹¹⁾を総代理人として、16人の理事によって運営された。

89) U. S. Bureau of the Census (1960)によると、1910年ではアメリカの人口の16%が外国生まれで、かれらの両親の40%は外国生まれであった。

90) スレーター財団とピーボディ財団が統合されて、スレーター・ピーボディ財団になった。The General Education Board (1915) p. 8.

91) シアーズ牧師はマサセチューセッツ教育委員会がホールズ・マンの後任を務めたあと、ロードアイランド州のブラウン大学の学長であった。

1880年のシアーズ牧師の死後、アメリカ・バプテスト同国内伝道協会の活動を南部で認めた南部バプテストのカーリーが、1881年からその後任に就いた。彼は、そのあとにスレーター・ピーボディ財団の総代理人となり、ピーボディ財団の目的を達成すると1903年に解散させた。1918年にスレーター基金の原資100万ドルにピーボディ財団の35万ドルが解散時に加えられた。同基金の活動は、下記の6つに分類された⁹²⁾。

- (1) 市や町の公立学校の開設を助け、市・町当局が肩代わりできるまで行う。
- (2) 州議会が州立学校を維持できるまで援助する。
- (3) 農村教育の振興を図るために、農村の学校の統合を推進して援助する。
- (4) モデルの実験学校への助成。
- (5) 教員養成学校への助成（黒人の師範学校への助成も含む）。
- (6) 1875年にテネシー州ナッシュビルにピーボディ師範学院を設置。同学院は1914年にジョージ・ピーボディ教員カレッジとなった。

ピーボディ財団の委託の条件が柔軟であったために、理事たちは多様な方法で、南部の教育に欠けていると思われる要求に応えられる援助をおこなった。同財団は北部から南部への私人の寄付として最初の事例であったと思われる。

② スレーター財団

スレーター財団は、コネチカットとロードアイランドで綿・毛織物業を営んでいたジョン・F・スレーター（John F. Slater, 1815-1884）によって100万ドルの寄付で1882年に設立された。同財団の目的は南部で奴隷解放されたアメリカ黒人に対して「キリスト教の精神に基づいて教育を与えること」であった。同財団は南部の教育振興において、新しい学校を建設するよりも、教師の訓練を行っていた既存の学校を援助する方法で黒人の教育を拡充させた。スレーター財団の運営責任者は、南部メソヂスト・エピスコパル教会

92) The General Education Board (1915) pp. 8-10; Cubberley (1947) pp. 439-441.

の A・G・ヘイグス牧師が務め、同基金の主な活動は下記のものであった⁹³⁾。

- (1) 黒人師範学校及び産業教育への助成。
- (2) 上記の学校に勤める教師の給与の一部負担。
- (3) 黒人学校のための教員を養成する師範学校への助成。

③ ジーンズ財団

ジーンズ財団はフィラデルフィアのクエーカー教徒であったアナ・T・ジーンズ（Anna T. Jeanes, 1822-1907）という女性から、「大きな学校を建設する人はいるが、私は、田舎に小さな学校を建設したい」という目的で 1908 年に設立された農村のための学校財団である。ジーンズは同財団を設立するまえの 1905 年 4 月に、南部の農村の黒人学校の支援目的で 20 万ドルの寄付を GEB に行っている⁹⁴⁾。同財団はほかの多くの寄付者から、35 年間に 222 万 5,000 ドルの寄付を集めた。1937 年にスレーター財団と同財団は統合され、新しく南部教育基金財団が設立された。ジーンズ財団は北部及び南部から白人を各 5 人、それに黒人 5 人の合計 15 人で構成される理事会によって運営され、同基金の主な活動は下記のものであった⁹⁵⁾。

- (1) 黒人への産業教育の巡回指導を行うための機関をカウンティに設置すること。
- (2) 上記の学校の設備の改善。
- (3) 保健及び家庭生活の改善を行う機関を郡ごとに設置すること。

ピーボディ財団、スレーター財団、ジーンズ財団以外の南部の黒人教育への教育財団としては、ニューヨークの C・ペルプス・ストークス（C. Phelps Stokes）という女性が、1909 年に 100 万ドルの寄付を行い、1911 年に設立されたペルプス・ストークス財団がある。同財団は実績と安定性が証明された学校に対して援助をすることを目的として活動した⁹⁶⁾。

93) *Ibid.*, pp. 10-11; Cubberley (1947) pp. 440-442.

94) *Ibid.*, pp. 16-17.

95) クォールズ (1994) 207 ページ。

96) Cubberley (1947) pp. 682-684.

ところで、アメリカ社会は1870年代を境として、急速に都市化、工業化される社会に変化し始めたが、南部の産業は1880年代になっても中々回復しなかった。1880年代後半から、南部の企業家たちは産業の回復に、まず、南部の彼らの意識を変化させることだと考えた。企業家たちは産業化を推進するために、北部における産業化の方法を部分的に取り入れ、公共・民間を問わず、地域内外の資本家から投資を呼び込むことで成功させようとした。そして、南部の産業界は人々に実業界での成功を目指すように仕向けた。

1890年代に入ると、南部の経済力は、繊維、タバコ、木製品、鉱石・鉱物資源の産業を中心に回復し、進展し始めて大幅に成長した。1880年の農業生産額が工業生産額よりも2億ドル多かったのに対し、1900年の工鉱業の生産額が3億ドル近く凌駕し、新南部を出現させた。産業の成長は新しい中産階層を形成して財政基盤を強化した。

南部の産業化を進めるうえで、貧困に伴う教育問題、人種差別、小作人制度、児童就労、服役囚賃貸制度等といった長年にわたる南部の問題が一段とクローズアップされた。そのなかでも教育の欠如という問題が重要であった。1890年には経済活動において、被雇用者の数は全体の3分の2を占めていた。南部と北部の企業家、教会関係者、教育の専門家たちは南部の産業化のなかで、それらの問題を避けて産業化を進めることはできなかった。白人や黒人を問わず、南部における教育に対する考え方の転換期であった⁹⁷⁾。

南部の産業化を進める目的で黒人教育を含めた南部の人々の教育に対する意識の向上を図るために、南部バプテストが中心になり、南部と北部バプテストの資本家の支援を受けて、「南部教育運動」(the Southern Educational Movement)を19世紀末から開始するのである⁹⁸⁾。因みにロックフェラーの什一献金の金額をみると、1899年から同献金の金額の単位が一桁上がり、ロックフェラー家のフィランソロピーが本格化したことが窺える⁹⁹⁾。

97) Edwards, Reich and Weisskopf (1972) p. 175.

98) The General Education Board (1915) pp. 8, 11-12.

99) 鮫島 (2011b) 122-112 ページ.

ここで、19世紀末の南部の宗教勢力の地域分布を明らかにしておくことが重要である。南部11州において、カトリックの強かったルイジアナ州を除き、ほかの南部10州ではバプテストとメソジストが大多数を占めた。1890年の教会人口¹⁰⁰⁾でみると、バプテストとメソジストの合計が占める割合はジョージアとミシシッピの2つの州では90%以上、アラバマ、アーカンソー、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ヴァージニアの5つの州では80%以上、フロリダ、テネシー、テキサスの3つの州では70%以上であった。

バプテストの占める割合は、ヴァージニア、ジョージア、ミシシッピの3つの州では50%以上、アラバマ、ノースカロライナ、アーカンソー、サウスカロライナの4つの州では40%以上、テキサス、テネシーの2つの州では30%以上、フロリダ、ルイジアナの2つの州では20%以上であった。

黒人社会において、黒人バプテスト教会は黒人自身の宗教的な発言を強くしている。北部バプテストが黒人教育の活動において、ほかのどの教派よりも人材・資金援助でずば抜けて多かった状況のなかで、南部バプテストは黒人の教育への取り組みははるかに小規模であり、黒人バプテストと分離していた。

宗教勢力の地域分布から分るように、南部バプテストは南部のバプテストの集中率やイデオロギーの面からも、同バプテストの存在を示さなければならなかった。南部バプテストのねらいは「南部教育運動」を開始して、ロックフェラー家に働きかけ、バプテスト教会内の和解と黒人たちの人気確保のために、黒人の中等教育の普及という目的でGEBを設立させることであった。

1898年にウェストヴァージニアにおいて、第1回「南部キリスト教教育会議」(the Conference for Christian Education in the South)が開かれ、翌年にはピーボディとスレーターの両財団の総代理人であったカーリーを議長に選び、第2回目「南部教育会議」(the Conference for Education in the South)という名称に変更されて

100) Gaustad and Barlow (2001) pp. 376-381.

討議された。1900年の第3回目の会議以降、ロバート・C・オグデン¹⁰¹⁾が議長を務めた。1901年の第4回目の会議ではカーリーを責任者として大学の学長たちを地区の指導者に任命し、調査・広報を備えた常設機関として「南部教育局」(the Southern Education Board)を設置した。この機関はGEBと共に南部の教育を改革して活気づける源泉となるのである¹⁰²⁾。

オグデンは自ら資金を提供し、教育者と牧師から構成されたキリスト教教育を主眼に置き、教育協議会(the Conference for Education)を開催した。この協議会はその後公立学校の要求を代弁する組織となり、GEB設立前からロックフェラー家と協力関係にあった。南部教育会議は、「南部教育運動」「南部会議運動」もしくはオグデンの名をとって「オグデン運動」(Ogden Movement)とも呼ばれた。この会議の決議においては、初等教育の徹底、学校の授業期間の延長、教員資格の充実、建物・設備の改善、移動図書館、産業教育などについての項目が当初から含まれていた¹⁰³⁾。

このことから、南部教育会議において、教育の専門家による吟味されたロードマップがあったことが窺える。また、北部と南部の実業界の指導者たちや専門職の人々が緊密な連合体を形成して財団を通じながら、南部の教育改革に取り組んだのである。

5.2 The General Education Board 設立までの経緯

20世紀になると、ルイジアナ、ノースカロライナ、ヴァージニアなどにおいて地域の教育課税が認められ、サウスカロライナ、アラバマでも州の教育税の増額措置がとられた。そして、ミシシッピでは、授業の日数を4カ月まで増加させることを目的とした特別税が設けられた。結果的には人民党の活

101) ロバート・C・オグデン(Robert C. Ogden, 1836-1913)は百貨店主で熱心な長老会の信者であったジョン・ワナメーカーの有能な側近であった。オグデンの南部における黒人教育について述べたものに、Ogden (1969) pp. v-x.

102) The General Education Board (1915) pp. 9-13; Knight (1969) pp.388-392 ; Cubberley (1947) pp. 671-675.

103) *Ibid.*, pp. 11-12; Knight (1969) pp.388-395 ; Cubberley (1947) pp. 673-678.

動などによって、南部の農民や労働者層の意識の覚醒や中産階層の発言力が増したことで、彼らの子供たちへの教育の要求が高まった¹⁰⁴⁾。

このような状況下で南部バプテスト連盟は教育の進歩を推進し確実なものにするために、専門的な指導力を備えた組織が必要であった。その目的のために南部バプテスト教会は北部バプテスト教会と分離していた黒人バプテスト教会に協力を働きかけていた。

ロックフェラーの親子とゲイツの3人は、アメリカ黒人の教育について、事前にブッカー・T・ワシントンから直接、彼の持論である職業教育を施すべきだという助言を受けていた。彼らはワシントン・アンド・リー大学のヘンリー・セント・ジョージ・タッカー学長などの黒人教育の専門家や南部に関する専門家からの情報も収集していた。彼らはバプテスト教会の要請を受けると、オグデンたちを交えて南部の黒人教育についての構想を練った。1901年にロックフェラー2世はオグデンの誘いに応じ、約10日間の南部教育機関の視察旅行に参加した。

ロックフェラー2世は視察旅行からニューヨークに帰るとすぐに、直接ロックフェラーに報告と相談を行い、承諾を得ると、The General Education Boardの設立の立案に取り掛った。ハーパーによって運営されたユニヴァーシティー・オブ・シカゴが尽力し、GEBが設立された。同財団の議長に北部の実業家であったウィリアム・H・ボルドウイン・ジュニア（William H. Baldwin, Jr.）が就任し、事務局長にアメリカ・バプテスト国内伝道協会の一員だったウォレス・バトリック牧師（Wallace Buttrick）が務めた。理事には、カーリー、オグデン、ジョージ・F・ピーボディ、ゲイツ、そしてロックフェラー2世たちなどが名を連ねた¹⁰⁵⁾。

1903年にロックフェラーのGEBの設立を国会が認めたことで¹⁰⁶⁾、同財団

104) Knight (1969)pp.385-387; Cubberley (1947) pp. 668-669.

105) The General Education Board (1915) pp. xiii-xiv.

106) 永続的な法人格を得るためにGEBの設立を国会に申請したのは、ロックフェラー2世の妻アビーの父親でロードアイランド州出身の有力な共和党上院議員のネルソン・アルドリッチであった。Fosdick (1953) p.118.

はスレーター財団との関係が深まり、両財団にパートナー関係が築かれた。GEBが密接な関係のあった教育協議会との協力体制を正式に敷いたことで、「南部教育運動」は一段と活発になった¹⁰⁷⁾。GEBは南部の人種的な枠組みのなかで、黒人と白人に分離された二重の学校制度をとりながらも、進学者数の増加や教育区支出面での増大につながり、結果的には部分的であるが、黒人の中等教育の普及という成功を収めた¹⁰⁸⁾。

この章をまとめると、ロックフェラー家は南北戦争後から、南部において、バプテスト教会や教育財団を通じて影響力を及ぼしていた。1890年代になると、南部の経済力は回復し成長に転じて、新中産階級を形成し、財政基盤を強化した。さらに産業化を進めるうえで貧困に伴う教育問題が重要視され、南部での教育に対する考え方の転換期となった。

南部バプテスト教会は自らの存在を示すために、19世紀末から北部の資本家の支援を受けて南部教育会議を開催し、「南部教育運動」を行った。南部バプテストは同運動を推進するために、資金・指導力を備えた組織が必要であり、ロックフェラー家に働きかけて黒人の中等教育の普及目的のためにGEBを設立させなければならなかった。1901年にロックフェラー2世はGEBの設立の立案に取りかかり、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴが尽力し、GEBが設立されることとなる。

おわりに

以上述べたことを要約し、今後の課題を示そう。

ロックフェラーは厳格な什一献金を行うことや教会活動を通じて、教会や

107) Knight (1969) pp.388-392 ; Cubberley (1947) pp. 671-675.

108) GEBは1903年に4,600万ドルの財源を持ち、その総額は1921年時点で、1億2,920万9,167ドルを保有し、同財団が消滅する1960年までに総額3億2,420万ドルを提供した。GEBの基金の使用内訳は、黒人教育に6,250万ドルで、その金額のうち経常経費への援助や設備関係に3,200万ドル、医学関係や科学部門に約1,000万ドルの助成を行った。南部での黒人の学校の教育改善プログラムに対して、約1,100万ドルの助成をした。Keppel (1938) p.17.; The General Education Board (1915) pp.23-29.

慈善事業であろうとも、ビジネス活動と同様に収支の勘定が重要であり、厳格に処理すべきだと考えた。このことから、彼の信仰心は効率的に利益を追求する姿勢と結び付き、彼のこの信念はロックフェラー家のフィランソロピーの精神に引き継がれた。また、同家の活動は教派等を超えて幅広く行われた。

南北戦争後の「再建」(Reconstruction)及び「再建後」(post-Reconstruction)の時代において、教会の分離に伴って独立する黒人教会が増えたことで限定的ではあったが、アメリカ黒人による社会的な組織化や教育水準の向上への道を開いた。黒人社会において、黒人バプテスト教会は黒人自身の宗教的な発言を強くした。北部バプテストの黒人教育への援助がほかのどの教派よりもずば抜けて大きい状況のなかで、南部バプテストは同教育への取り組みは小規模であり、黒人バプテストと完全に分離していた。南部バプテストはバプテスト教会内や南部での自らの存在を示さなければならなかった。

バプテスト教会から同派の高等教育の目的で新しいカレッジの設立要請を受けていたロックフェラーは、ゲイツ、ハーバー、そしてアメリカ・バプテスト教育協会に協力して、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴをアメリカのユニヴァーシティーの新しいモデルとして設立した。同大学はロックフェラー家のその後のGEB設立に欠かせないものであった。

1890年代に入ると、南部の経済力は回復し成長に転じて、新中産階級を形成し、財政基盤を強化した。更に産業化を進める上で貧困に伴う教育問題がクローズアップされ、南部での教育に対する考え方の転換期となった。南部バプテスト教会は自らの存在を示すために、19世紀末から北部の資本家の支援を受けて南部教育会議を開催し、「南部教育運動」を行った。南部バプテストは同運動を推進するために、資金・組織力を備えた財団が必要であり、ロックフェラー家に働きかけて黒人の中等教育の普及目的のためにGEBを設立させなければならなかった。1901年にロックフェラー2世はGEBの設立の立案に取りかかり、ユニヴァーシティー・オブ・シカゴが尽力し、GEBが設立されることになった。これがバプテスト教会の要請を受けたロックフェラー家

の GEB 設立の歴史的前提である。

今後の課題は、南部教育会議において、北部と南部の実業界の指導者たちや専門職の人々が緊密な連合体を形成して財団を通じながら、南部の初等、中等、高等教育改革に取り組んだなかで、結果的には農業開発へと繋がった GEB の黒人の中等教育の普及とは具体的にどのように形成されたのか。この点について研究を進めたい。

【参考文献】

- Abels, Jules (1967) *The Rockefeller Millions: the Story of the World's most Stupendous Fortune*, London: Muller. (エイベルズ, ジュールズ (1969) 『ロックフェラー——石油トラストの興亡——』現代経営研究会訳, 河出書房新社.)
- Ascoli, P. M. (2006) *Julius Rosenwald*, Bloomington, Indianapolis: Indiana University Press.
- Beale, H. K. (1978) *A History of Freedom of Teaching in American Schools*, New York: Octagon Books, Inc.
- Berlin, Ira, J. P. Reidy and L. S. Rowland, eds.(1982) *The Black Military Experience*, Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Bremner, R. H. (1988) *American Philanthropy*, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press.
- Cubberly, E.P. (1947) *Public Education in the United States: A Study and Interpretation of American Educational History an Introductory Textbook Dealing with the Larger Problems of Present-day Education in the Light of their Historical Development*, revised and enlarged ed., (1st ed., 1919), Boston: Houghton Mifflin.
- Dexter, E. G. (1904) *A history of Education in the United States*, New York : Macmillan
- Edwards, R. C., M. Reich and T. Weisskopf (1972) *The Capitalist System*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Flexner, A. and F. P. Bachman (1916) *Public Education in Maryland: A Report to the Maryland Educational Survey Commission*, New York: General Education Board.
- Flynn, J. T. (1932) *God's gold : the Story of Rockefeller and His Times*, Harcourt: Brace and Co.

- Fosdick, R. B. (1953) *John D. Rockefeller, Jr.: A Portrait*, New York : Harper.
- Fosdick, R. B. (1962) *Adventure in Giving, the Story of the General Education Board*, New York: Harper and Row.
- Frederick, K. P. (1989) *The Foundation : Its Place in American Life* , New Jersey: Transaction Publishers.
- Gates, F. T. (1897) *The Truth about Mr. Rockefeller and The Merritts*, California: Cornell University Press.
- Gaustad, E. S. and P. L. Barlow (2001) *New Historical Atlas of Religion in America*, New York: Oxford University Press.
- Goodspeed, T. W. (1916) *A History of the University of Chicago Founded by John D. Rockefeller: The First Quarter*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Hatch, N. O. (1989) *The Democratization of American Christianity*, New Haven: Yale University Press.
- Hill, C. (2006) *The Civil War as a Theological Crisis*, North Carolina: University of North Carolina Press.
- Knight, E. W. (1969) "Education in the South," in *Twenty-five Years of American Education*, edited by I. L. Kandel, (1st ed., 1924), New York : Arno Press & The New York Times, pp. 369-402.
- Lemann, N (2006) *Redemption: The Last Battle of the Civil War*, New York: Straus and Giroux.
- Marini, S. A. (1982) *Radical Sects of Revolutionary New England*, Cambridge, Ma: Harvard University Press.
- Nevins, A. (1940) *John Davison Rockefeller* , New York: Charles's Sons.
- Nevins, A. (1953) *Study in Power: John D. Rockefeller, Industrialist and Philanthropist*, 2 vols., New York, London: Charles Scribner's Sons.
- Nevins, A. (1962) *The State Universities and Democracy*, Urbana: University of Illinois Press.
- Noble, S. G. (1969) "Education of the Negro," in *Twenty-five Years of American Education*, edited by I. L. Kandel, (1st ed., 1924), New York : Arno Press & The New York Times, pp. 403-429.
- Noll, M.A. (2001) *A History of Christianity in the United States and Canada*, Grand Rapids:

- Eerdsman Publishing Co.
- Ogden, R.C. (1969) *From Servitude to Service*, (reprint of the 1905 ed., Boston: American Unitarian Association), New York: Arno Press & The New York Times.
- Otken, C. H. (1973) *The Ills of the South, or, Related causes Hostile to the General Prosperity of the Southern People*, New York : Arno Press.
- Rockefeller, J. D. (1909) *Random Reminiscences of Men and Events*, New York: Doubleday Page.
- Shaplen, R. (1964) *Toward the Well-being of Mankind: Fifty Years of the Rockefeller Foundation*; foreword by J. George Harrar; edited by Arthur Bernon Tourtellot, Garden City, New York: Doubleday.
- The General Education Board (1915) *General Education Board 1902-1914*, New York: The General Education Board.
- The General Education Board (1916) *Public Education in Maryland*, New York: The General Education Board.
- U. S. Bureau of the Census (1960) *Historical Statistics of the U. S.: Colonial Times to 1957*, Washington D. C. : U. S. Government Printing Office.
- アルドリッジ, N. W. Jr. (2004) 『アメリカ上流階級はこうして作られる——オールド・マネーの肖像——』 酒井常子訳, 朝日新聞社.
- アシザワ, K. G. (2008) 「アメリカのフィランソロピーは日本にどう向き合ったのか」, 山本正編 『国際政治・日本外交叢書⑤ 戦後日米関係とフィランソロピー——民間財団が果たした役割, 1945～1975年——』 ミネルヴァ書房, 所収, 75-107 ページ.
- バプテスト史教科書編纂委員会 (2011) 『見えてくるバプテストの歴史』 関東学院大学出版会.
- チャーナウ, R. (2000) 『タイタン——ロックフェラー帝国を創った男——』 上・下, 井上廣美訳, 日経 BP 社.
- コーブランド, R. E. (2003) 『アメリカ南部バプテスト連盟と歴史の審判——ひとつの根源的な罪の痕跡——』 八田正光訳, 新教出版社.
- クリスチャン, J. T. (1979) 『バプテスト教会史』 天利信司, 山上雄治共訳, バプテスト文書刊行会.

- デュボイス, W. E. B. (2006) 『黒人のたましい』 木島始, 鮫島重俊, 黄寅秀訳, 未来社.
- デューイ, J. (2005) 『学校と社会』 宮原誠一訳, 岩波書店.
- エイミー, J. L. (2004) 『囚われの民, 教会——南部バプテストの社会的姿勢に見る, 教会と文化の関係史——』 金丸英子訳, 教文館.
- 圓城寺哲 (1939) 『ロックフェラー傳』 昭和圖書.
- フォーナー, E. (2008) 『アメリカ自由の物語——植民地時代から現代まで——』 上・下, 横山良ほか訳共訳, 岩波書店.
- フレイジア, E. F. (1972) 『アメリカの黒人教会』 溝淵寛水訳, 未来社.
- フォスディック, R. B. (1956) 『ロックフェラー財団——その歴史と業績——』 井本威夫, 大沢三千三共訳, 法政大学出版局.
- フラクリン, B. (1957) 『フラクリン自伝』 松本慎一, 西川正身共訳, 岩波文庫.
- 本田創造 (1964) 『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』 岩波書店.
- 関東学院大学キリスト教と文化研究所バプテスト研究プロジェクト (2007) 『バプテストの歴史的貢献』 関東学院大学出版会.
- 上智大学アメリカ・カナダ研究所 (2011) 『キリスト教のアメリカ的展開——継承と変容——』 Sophia University Press 上智大学出版.
- 小柳正司 (2010) 『デューイ実験学校と教師教育の展開——シカゴ大学時代の書簡の分析——』 学術出版会.
- ロング, H. G. (1983) 『アメリカを生きた子供たち——図書館の果たした役割——』 三好万記子, 宗重まり子, 西村醇子共訳, 日本図書館協会.
- メアリング, N.H. / W. S. ハドソン (1968) 『バプテスト教会の形成』 大竹庸悦, 藤原三千男共訳, 日本バプテスト同盟教育部.
- メリアム, C. E. (2006) 『シカゴ——大都市政治の臨床的観察——』 和田宗治訳, 聖学院大学出版会.
- 三井報恩會 (1934) 「資料第2号 社会事業に就て」 三井報恩會.
- 三井報恩會 (1938) 「資料第33号 ロックフェラー財團最近の動向」 三井報恩會.
- 宮田由紀夫 (2009) 『アメリカにおける大学の地域貢献——産学連携の事例研究——』 (株)中央経済社.
- 森孝一 (1997) 『アメリカと宗教』 日本問題研究所.

- 森孝一 (1997) 「シカゴ万国宗教会議:1893年」『アメリカ研究』(同志社大学), 第26号, 1-26 ページ.
- 中野和光 (1989) 『米国初等中等教育課程の成立過程の研究』風間書房.
- 日本聖書教会 (2009) 『聖書 BIBLE』日本聖書教会.
- ニールセン, W. A. (1984) 『アメリカの大型財団——企業と社会——』林雄二郎訳, 河出書房新社.
- ノール, M. A. (2010) 『神と人種——アメリカ政治を動かすもの——』赤木昭夫訳, 岩波書店.
- 岡林裕 (2005) 『アメリカ二大政党制の確立——再建期における戦後体制の形成と共和党——』東京大学出版会.
- 大宮有博 (2006) 『アメリカのキリスト教がわかる——ピューリタンからブッシュまで——』キリスト新聞社.
- クォールズ, B. (1994) 『アメリカ黒人の歴史』明石紀雄訳, 明石書店.
- ルドルフ, F. (2003) 『アメリカ大学史』安部美哉訳, 玉川大学出版部.
- ロビンソン, H. H. (1985) 『バプテストの本質』高野進訳, ヨルダン社.
- ローウィック, G. P. (1986) 『日没から夜明けまで——アメリカ黒人奴隷制の社会史——』西川進訳, 刀水書房.
- ローゼンガーデン, C. (2006) 『アメリカ南部に生きる——ある黒人農民の世界——』上杉忍訳, 彩流社.
- 鯨島真人 (2010) 「ジョン・D・ロックフェラー1世の企業家活動と富の集積——1839-1911年—— (1)」『経済学論叢』(同志社大学), 第62巻第3号, 155-202 ページ.
- 鯨島真人 (2011a) 「ジョン・D・ロックフェラー1世の企業家活動と富の集積——1839-1911年—— (2)」『経済学論叢』(同志社大学), 第62巻第4号, 215-265 ページ.
- 鯨島真人 (2011b) 「ジョン・D・ロックフェラー1世の什一献金とフィランソロピー活動」『経済学論』(同志社大学), 第63巻第3号, 113-148 ページ.
- 佐々木隆, 大井浩二 (2006) 『都市産業社会の到来——1860年代-1910年代——』東京大学出版会.
- 世界教育史研究会 (1975) 『世界教育史大系 17——アメリカ教育史 I——』梅根悟監修, 講談社.

- ターナー, J. C. (1950) 『バプテストの嗣業』 吉田敬太郎訳, ヨルダン社.
- ヴェーバー, M. (1989) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳, 岩波書店.
- ウッドワード, V. C. (1977) 『アメリカ人種差別の歴史』 清水博ほか訳, 福村出版.
- ザンズ, O. (2005) 『アメリカの世紀——それはいかにして創られたか?——』 有賀貞, 西崎文子共訳, 刀水書房.

Foundation Center, Top Funders,

<http://foundationcenter.org/findunders/topfunders/top100assets.html>

The University of Chicago,

<http://www.uchicago.edu/index.shtml>

American Baptist Churches USA,

<http://www.abc-usa.org/Resources/AmericanBaptistNewsService/tabid/79/Default.aspx>

(さめしま まさと・同志社大学大学院経済学研究科後期課程)

The Doshisha University Economic Review Vol.64 No.2

Abstract

Masato SAMESHIMA, *The Philanthropic Ambitions of the Rockefeller Family and the Baptist Church: The Historical Presupposition of the General Education Board*

John D. Rockefeller believed that the count is important for charity in the same way as tithes and contributions are to the Baptist Church. His beliefs were based on the philanthropic ambitions of the Rockefeller family, who established the University of Chicago at the request of the Baptist Church. During the time of Reconstruction and post-Reconstruction, problems of black education in poorer communities and racial discrimination hindered the growth of industry in the South. The Baptist Church and businessmen needed a foundation with both funds and an ability to organize to encourage an education movement in the South. These became the historical presuppositions of the General Education Board.